

真宗大谷派 即得寺 歴史由緒・調査報告略記 ～鈴木三郎繁家の伝承と、当寺における生存の系譜～

『吾妻鏡』の記述と、秋田・愛知に残る「二つの生存説」の比較検証

1. 鈴木三郎繁家

鈴木三郎繁家（すずき さぶろう しげいえ）は、史料では繁家と重家の二通りあり、紀伊国藤白（現在の和歌山県海南市）を本拠とした熊野権現の神官、藤白鈴木氏の一族です。鈴木氏は熊野三党の一つに数えられる名門であり、全国に広がる「鈴木姓」のルーツの一つとしても知られています。

繁家と源義経の縁は深く、義経が幼少の牛若丸時代に熊野を訪れた際からの交流があったと伝えられています[2,3]。後に義経が挙兵すると、繁家は弟の亀井六郎重清とともに義経の有力な郎党（義経十九臣の一人）として活躍しました。文治年間（1185～89年）、義経が兄・頼朝と対立し奥州平泉へと落ち延びる際も、繁家は忠義を尽くしてこれに従いました。

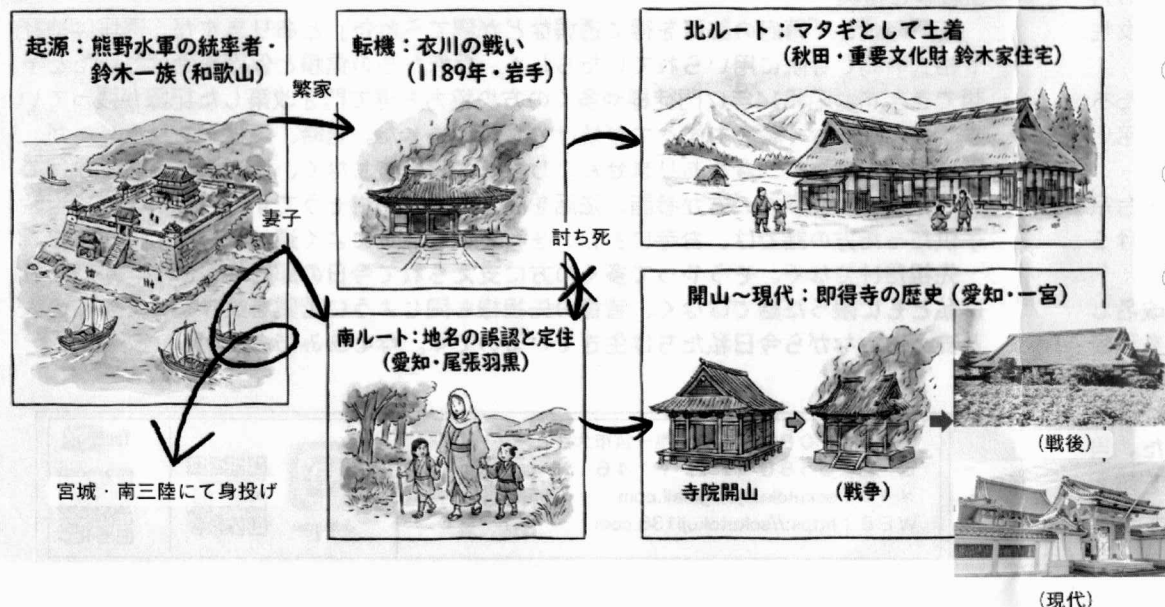
2. 三通りの伝承

鎌倉の時代の史料は少なく説も一つではなく様々に伝承されている。

文治5年（1189年）、奥州平泉・衣川の戦い。源義経主従の最期の地とされるこの場所から、歴史は三つの「物語」を紡ぎ出しました。

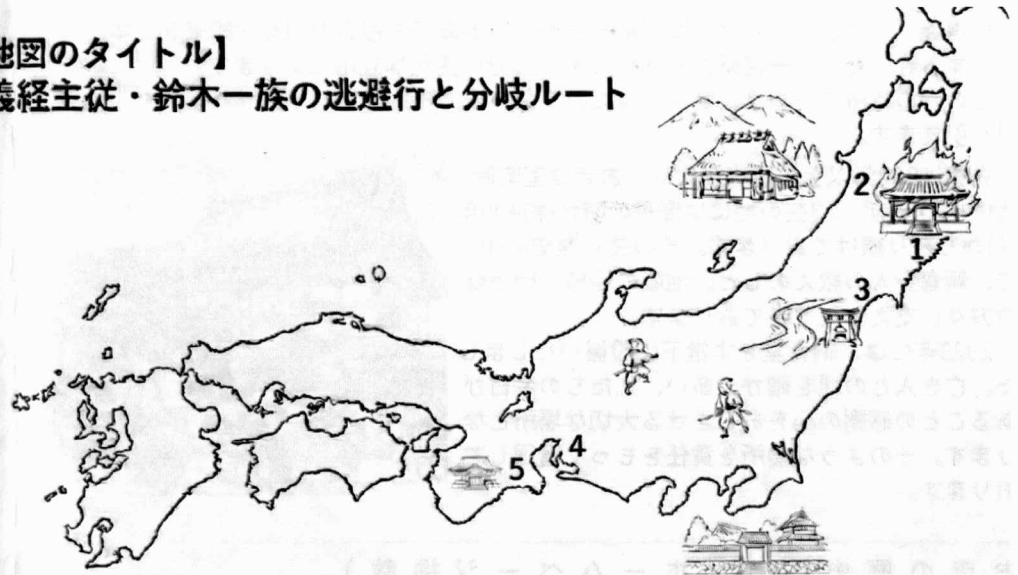
- (1) 衣川の戦いで繁家の討ち死と妻・小森御前の宮城での自害した物語。[3,4]
- (2) 繁家は生き逃れ、さらに秋田へ逃れて土着した物語。[5]
- (3) 繁家の妻子が、地名の誤認から愛知（尾張）の地に根を下ろした物語。[1]

【図解】鈴木一族と即得寺の歴史フローチャート



【地図のタイトル】

義経主従・鈴木一族の逃避行と分岐ルート



- ① 岩手（平泉・衣川）
 - ・ 1189年 衣川の戦い 源義経主従が藤原泰衡軍に襲撃された地。[2,3]では重家もここで討ち死にしたとされる。
- ② 秋田（羽後町）
 - ・ 重家は戦場を脱出し、さらに北へ逃れたという伝承が残る。マタギ（狩人）として土着し、その血脈を後世に伝えた。[5]
- ③ 宮城（南三陸町）
 - ・ 小森御前社 重家の妻・小森御前が夫の討ち死の報せにより、絶望して川へ身を投げたという悲劇の伝承地。[4]
- ④ 愛知（犬山⇒一宮）
 - ・ 即得寺 繁家の妻子らが、苦難を乗り越えこの地に定住。一族の菩提を弔い続け、子孫の観智が開山し現在に至る。[1]
- ⑤ 和歌山（海南市・藤白）
 - ・ 鈴木一族の本拠地 熊野水軍を率いる鈴木氏の発祥の地。重家の父・鈴木重氏と弟・重吉が留まり、家名を継承した場所。[2]

参考文献一覧

- [1] 『史録いちのみや』（松本勝二著）郷土出版社
- [2] 『吾妻鏡』（鎌倉幕府公式記録）
- [3] 『義経記』（室町時代成立 軍記物語）
- [4] 南三陸町「小森御前社」伝承（宮城県）
- [5] 重要文化財「鈴木家文書」（秋田県羽後町・鈴木家所蔵）

お寺のご紹介（ホームページ掲載）

即得寺（そくとくじ）は、愛知県一宮市にある真宗大谷派の阿弥陀如来をご本尊とする寺院です。一宮駅から徒歩わずか10分の便利な立地にあります。

この寺の特徴の一つは、鮮やかなピンク色の塀で知られており、訪れる人々の目を引きまします。

先祖は800年以上の歴史があり、お寺は室町時代(約600年前)、現在の地には慶長の時代(約400年前)から在り続けております。その長い歴史の中で、親鸞聖人の教えのもと、地域の皆様、門信徒の方々に支えられてきております。

2023年には、納骨堂を本堂下に設置いたしました。亡き人との縁を確かめあい、私たちの今日があることの感謝の心をおこさせる大切な場所となります。そのような場所を責任をもって管理しております。



お寺の歴史[1]（ホームページ掲載）

先祖の記録は最も古いもので、約800年前の文治年間（1185～89）に遡ります。その時、伊勢国で熊野権現に奉仕していた鈴木三郎繁家の記録が最も古いものとして残っています。当時、繁家は源義経に仕える家系でした。

義経は兄の頼朝との対立から奥州に落ち、わずかな仲間と共に逃れました。その仲間に、繁家も含まれていました。しかし、途中で繁家の妻子たちは義経の行方を追いましたが、誤って尾張国羽黒郷に辿り着きました。当時、足の弱い女性や子供たちには遠く奥州までたどり着くのは困難な事でした。

後に、風の噂で義経と繁家が藤原一族に討たれたことを知り、繁家の妻子たちはこの地を離れずに永住することを決意しました。それ以降、彼らは繁家を弔いながらその地に住んでいました。

明徳年間（1390-1393）、繁家の子孫、観智はこの一宮に来て、九品寺に天台宗の寺院を建立しました。本尊は阿弥陀如来で、この寺は宮法山長福寺と名付けられました（応永元年、1394年）。

その後、応永十九年（1412年）、観智は真宗に改宗し、寺号を即得寺に改名しました。慶長年間（1596-1614）、七世願誓の時代になり、現在の場所に寺を移転させました。

当時、この寺の本尊である阿弥陀如来を求めて、多くの信徒の方が訪れました。江戸幕府初期には、幕府の許可を得て透塀などの建物が建てられました。当時、境内には本堂、水屋、茶所、鐘楼、透塀、庫禅、書院などがあり、300を超える門信徒がいました。しかし、戦争で建物はすべて失いましたが、戦後間もなく再建されました。

今回の調べたお寺の歴史の考察

1. しげいえさん

今回、即得寺の歴史のを調べるにあたり、根拠となる史料までは見つけれませんでした。鎌倉時代であることと一度戦争で燃えてしまっていることもあり、残っている史料が少なく、その中で推測して今回紙芝居のお話にまとめました。

一宮の史料に記載のあった「鈴木三郎繁家」と義経関連の史料に出てくる重家は同一である確証はないのですが同じである可能性が高いため今回祖先としました。

義経の物語『義経記』や鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』では繁家は衣川の戦いにおいて討ち死にしているとされていますが、秋田または静岡に隠れて生き抜いた話もあるようです。

2. しげいえさんのおくさんとこども

繁家の妻は、今回調べた限りでは正確な名前や情報は得られませんでした。小森御前という名で繁家が死んだことを知って宮城で自害した伝承が残っているようです。一方で即得寺の史料には妻の名前などは記載はなかったのですが、妻子が生き抜いた記録として残っています。

今回は、追ってから逃れるために公的には死んだと公表されたが実は隠れて生き抜き現代にもその生きた証が残されたのではと推測しました。

尾張国羽黒郷は現在の犬山市羽黒あたりですが、奥州の羽黒と間違えたという話より尾張国羽黒郷に逃げるように言われた方が自然と思いました。そこで200年ほど定住した後、子孫の観智さんがお寺を開山したのが始まりです。今では、観智さんから24代続いています。

3. 戦争と復興

江戸時代、「幕府の許可を得て透塀などが建てられた」とありますが、透塀は神社や格式の高い寺院に用いられていたらしく、幕府からの信頼と保護を受けていたと予想できます。昭和14年に門徒様や多くの方の協力も得て門を改築した記録が残っていますが、間もなく戦争ですべてが焼けてしまいました。当時、鐘楼もありましたが、戦争で失って以来、今もありません。しかし、戦後まもなく、皆様の支えのおかげでお寺は復興し、多くの方が参詣、法話を聞きに来ていたそうです。今もご存命で当時子供だった方の話では、お寺にお勤めを教えてもらいによく通っていたと聞きます。

先祖だけでなく、そうやって多くの方に支えられて今日の即得寺があります。これは私どもに限った話ではなく、皆様の先祖様も同じように苦難を乗り越えて多くの人と支えあいながら今日私たちは生きているのです。なむあみだぶつ

〒491-0851 愛知県一宮市大江2-7-20

電話：0586 (71) 7146

メール：sokutokuojo@gmail.com

WEB：https://sokutokuji138.com



YouTube

